

— 書 評 —

ツェリン・オーセル、王力雄著／劉燕子編訳 集広舎

『チベットの秘密』

(新潟大学) 真水 康樹

本書の書評はとても難しい仕事に感じられた。評者を逡巡させたものはなにか。正直に言えば、ツェリン・オーセルによるⅠ章「詩編」・Ⅱ章「エッセイ」と、王力雄によるⅢ章「チベット独立へのロードマップ」・劉燕子によるⅣ章「雪の花蕊」との間に感じられる不協和音なのである。それは意図的な分業なのかも知れないが、控えめなⅠ章・Ⅱ章に対して、Ⅲ章・Ⅳ章はあまりに能弁に思われ、異質感を懐かざるを得なかった。オーセル・王力雄が強い絆を持つパートナー同士であることは認識しているが、評者の我が儘な主観は、本書の約4分の3を占めるオーセル執筆部分（21－280頁）に書評を限定すべきことを求めた。

Ⅱ章には7つの中見出しが付されており、小見出しでは40篇のエッセイが収められていることになる。しかし、もともと続いていたのに、小見出しによって別のエッセイになっていると思えるものもある。また、文末に日付の付いているものとそうでないものが混在していて、日付のあるものは20篇となる。このあたりは幾分か信頼性を低める編集の仕方に見える。このⅡ章のエッセイでは、実に多くのことがルポされている。主なものをあげれば以下のようなものである：グライ・ラマの亡命から49年目にあたる2008年3月10日から実際には始まった「三・一四事件」；資源の乱開発と汚職、開発による文化破壊・生活破壊・資源枯渇さらには環境破壊の被害；中国の代表メンバーとして人権問題に関する国際会議に出席したために海外の独立派チベット人の抗議行動に遭遇し精神的な葛藤と苦痛を味わうチベット僧ニマ・ツェリン；公権力による日常的な監視と呵責のない暴力の実態；チベット語の危機という文化破壊；広東語軽

視に対する抗議は許されるのに少数民族言語について同じことをすると「分裂主義者」にされてしまう現実；「漢人に自由がなければチベット人には自治はない」という劉曉波の立場；「〇八憲章」や連邦共和制に対する留保；チベットと同じ境遇にあるウイグルへの共感；「我が身を炎と化」す人々への敬意；文化大革命時に行われたガンデン寺の破壊とツォンカパ法体（ミイラ）に加えられた野蛮な暴力など、どれも興味深い。その豊かな内容については、直接本書に触れることをお勧めしたいが、ここでは評者が意識せざるをえなかった幾つかの点についてのみ触れたい。

第一は、チベット問題の解決に対するオーセルの立ち位置である。文体は柔らかながら、そして劉曉波への信頼と敬意は惜しまないものの（231－234頁）、また、「〇八憲章」の積極的な意義は認めつつも、オーセルはその多民族共存のヴィジョンに対する懐疑を、オブラートを何重にも折り返しながら言及している（241－242頁）。つまり、オーセルの描くチベットの将来は、中国の人権活動家とさえ距離を置くものなのである。

第二は、問題の所在についての認識である。本書でも文革期のガンデン寺における文化破壊について触れられている（260－280頁）が、チベットにおける文化大革命に切り込んだオーセルの大作である『殺劫』（集広舎、2009年刊）にしても、また、内モンゴル文革に関する楊海英の『墓標なき草原』（岩波書店、2009年刊）にしても、告発の射程は文革のみで終わっていない。ここで問われているのは、中国共産党そのものなのである。例えば、楊海英は中国経由ではなく、ソ連や日本経由で共産主義を学んだモンゴル青年の存在を描いている（楊海英〔上〕122頁：〔下〕12頁）。彼らは民族自決思想として共産主義に触れるわけだが、後になって「中国」共産党によって粛清されていく。一般に中国共産党寄りとみられるウランフ（雲澤）でさえ迫害の対象となった（楊海英〔上〕

22頁)。オーセルは大漢族主義を体現した中国共産党と漢族に対して批判的な視線を貫いている。評者の知る限り、「台湾の悲哀」を語る台湾の漢族でさえ、チベットとなるとむき出しの漢族になったりする。さらに、個人的体験をひとつ紹介すれば、15年以上も昔のことだが、韓国アムネスティの招きで訪韓した中国人権活動家の講演をソウルで聴いたことがある。家族の多くが犠牲になり共産党支配の辛酸をなめ尽くして米国に亡命したこの人物と講演後のレセプションでたまたま会話の機会を得た際に、「あなたは中国語ができるんだから、何で韓国語なんか勉強するんだ」と言われて驚愕したことがある。評者の尊敬する教養ある中国知識人の友人たち——その多くは漢族であり、青年期の10年を家族と離れてチベットでの医療の普及と病院建設に費やした老医師も含まれる——を想うと断言にはとまどいがあるのだが、オーセルはマジョリティが無意識に共有している思い上がりにも似た姿勢を問うているのである。

第三に、見下すような意識を含んだこの視線は「中華民族」という言葉が前面に出れば出るほど威圧感を増していく。56の民族全てを包含するこのコンセプトは、その範囲から言えば「中国籍」と同義であり、国籍という単に法的な帰属の問題としてすまずこともできる。しかし、それを民族と言い換えた途端に文化的な帰属性の問題となり、翻ってはアイデンティティの同一性を迫る息苦しいものとなる。そして、中華民族は結局は漢族にすり替えられる。そこにあるのは漢族への同化である。中国語は56種類存在するという建前だが、中国語でも「中文」と言えば、結局は漢語のことに他ならない。中文である広東語を守ろうとしてデモをしてもお咎めなしだが、チベット語のために声を上げデモをすれば犯罪にされかねない(206-211頁)。モンゴル語で宛名を書いた手紙を内モンゴルの郵便局で受け付けてもらえない、という事例もある(楊海英[上] 248-249頁)。本

書の立場は、「チベットは、占領者が被占領者を統治している土地だ」(131頁)ということなのであろう。1998年から2001年、2004年と評者は3回チベットに行ったがラサの変貌ぶりは痛ましいほどだった。

本書には、書名と同じタイトルの長編詩「チベットの秘密」(41-53頁)が収められている。その中に「命取りになるスローガン」という言葉があるが、その意味は詩中では明らかにされていない。しかし、エッセイではそのスローガンを、「プ・ランツェン [チベット独立]」のことだと明言している(279頁)。オーセルの中では、中国とチベットは別の国なのだろう。しかし、氏はそれを声高にも直接的にも語らない。東ティモールは独立はしたものの、援助漬けであり自立にはほど遠い。チベットに変革が必要だとしても、統治能力の問題は重要である。また、中国の55少数民族についても、その違いは大きい。100万人を超える大民族であるチベット人やウイグル人が、マイノリティである1万人に満たない少数民族に対して、一切の差別を行わないなどという保証はあるのだろうか。オーセルの主張の穏やかさと柔軟さは、そこまで見据えた彼岸的な視点に立っているが故ではなかろうか。本書の中で心に残って離れないのは、前述のニマ・ツェリンについてのエッセイである。その語調は告発的でもなく、説教じみてもいない。この僧に寄り添うような暖かさをたたえている。この文体の存在ひとつに、オーセルの成熟した思想性を感じようとするなら、評者の読み込み過ぎであろうか。もちろん、それは弱々しさとは対極にある。自分の身を烈火で焼き焦がす人々についてのエッセイに読み取れるように、達観の中にも現状を見据えその先を見通すオーセルの真摯な視線は、その穏やかさによって、本評冒頭で指摘した不協和音をも抱擁するのである。

(2012年11月刊, 416ページ, 本体2,800円+税)